

## 救いの証し

氏原督雄（うじはら よしお）

51年前、私はこの教会の古い階段を昇り、毎週聖歌を唄う人であった。なぜここに来たのかは分からない。“お召し”であったのでしょうか。その後も京都の同志社で哲学を学び、時には神学部の人と共に学んだ。キリスト者に囲まれての生活を過ごす。卒業後、40年にわたり教員として歴史や倫理・社会・経済などを教えた。キリスト教とは常にかかわる生活であったといえる。心に物足りなさを感じた時には近隣の教会に出かけ、メッセージを聞いた。しかし、私は”キリスト者”にはなれなかった。信じる決断ができなかったのである。

ところが...定年も過ぎいよいよ遊ぶぞ!!と思った時、何かが起こった...気が付けば病院のベッドにいた。脳内出血で倒れ、4日後に発見されたらしい。担当医は、この人は助かっても生涯寝たきりになると言ったらしい。なかなか意識も戻らず...周りは私を死んだと思っただけで、お別れメールを送ったり、私の「遺品」を片つける人もいたらしい。不思議な夢を見た。友人がバプテスマを授けるヨハネの姿で現れ、私はこの人に道を尋ねようとしていた。またある時には私はシベリアの病院にいて、病室を出て、外の小川で水を飲もうとしたら、株のかげからロシアの少女兵に銃を向けられている。「撃たないでくれ。俺の脳みそはすでに爆発してるんや...!」。いくつかの夢を見た後、私はベッドで目を覚ました。それからは、長く厳しいリハビリの毎日。左半身マヒ。坐ること、話すこと...そして立つこと。トイレも二人介助。もう私の左半身は動かなくなった。

絶望のみのある日、私の左足に高圧電流のようなものが走った。不思議な力が私に及び、突然左足が踊りだした。「イエス様が、私のそばを通りかかって触れて下さったか?」...聖書の中の物語みたい...しかし、分からない。助からない命が助かったり、動かない足が動いたり...どれもこれも分からない。友人が届けてくれる信仰書や何度も読み返す聖書によって、なんとなく謎が解けてくる。

「ふ...む、神様やな??」そうとしか思えない。

施設に移って1人部屋。独房やな...。しかし、この部屋で聖書を読み私の友人が届けてくれる礼拝のCDを聞いて過ごす。この部屋はいつか修道院になったような...。(その友人鍛治先生の名をとって私はモンテ・カッジーノ修道院と名づけた)。いろいろ困った問題も起こるが、その度毎に私は祈る。すると“思いどおり”ではないが、予想外の解決策が与えられる。そして感謝の祈り。ここまで51年間の私の思い違い。“信じる”ことは私の決断ではなかった。“信じる”ことは救いの恵みとして与えられている。信仰は恵みやったんか。今の私は新しいいただいた命、感謝です。

「あなた方が私を選んだのではなく

私があなた方を選んだのである」(ヨハネ 15:16)

2022年11月20日